



竹に羽根をつける矧(は)ぎ専門の矢師として50年のキャリアを持つ大山さん。「どんな使い方をしているかは、矢をひとめ見ればわかる。大切に使われていると、矢を作ってよかったと思いますよ」

矢を放つと笛のように鋭い音が聴くことから魔を祓うといわれ、古くは鎌倉時代に使われていた“暮目(ひきめ)矢”。矢の先の暮目に漆を塗り、天然の矢羽根を矧ぎ付けたこちらのオリジナル。家内安全の飾り矢として、人気があるのだそうです。



今月のまち／熊本県熊本市

# こだわりと努力で継承する 竹矢に日本の伝統を見る

日本の武道のひとつ、弓道。

狩猟や武器としての用途から長い年月を経て、

自己鍛錬のための武道、さらにはスポーツの要素を加えて発展してきました。

その道具である弓矢作りを代々受け継ぐ店を熊本に訪ね、その技にふれてきました。



「伝統や技術は一度絶えてしまうと、復活するのはかんたんではありません。そのためにも続けていくことが大切なんです」と高橋良明さん。

熊本で店を構えるタカハシ弓具店は、文政12(1829)年、肥後細川藩のお抱え御弓矢師として創業。昔のままの技法で竹の弓矢を作る一方、戦後は丈夫で使いやすいアルミ製の矢、グラスファイバー、カーボン素材の弓を開発し、弓道人口の底上げに貢献してきました。今や高校・大学のほぼ100%のクラブが、これら新素材の弓矢を使用しているそうです。そんななか「新しいものを取り入れたことで、伝統を次世代に遺そうという想いがより強くなりました」と話してくださったのは、五代目となる高橋良明さんです。

中てるのが目的のアーチェリーとは違い、日本の弓矢の形はとてもシンプル。竹矢は、完成までいくつもの工程を必要とし、時間と手間がかかります。だからこそ竹の矢には味わいが生まれるのだそうです。「弓道の矢は4本か6本で一組。天然素材ゆえに節や太さなどひとつとして同じものはないので、すべて同じに作るのはいかなかなか難しい。一箭有心」という言葉があります。が、これは一本の矢(箭)にも心があるという意味。一本一本個性があるものを使いこなすことが、弓道の醍醐味でもあります。

こだわりの技法を今に伝えています。「漆は塗料のなかでいちばん硬く、古くから弓矢づくりには欠かせない素材。さらに筒(竹)を漆でコーティング(拭き筒)することで長期の使用にも耐えうる矢になります」と教えてくださったのは、50年のキャリアを持つ工房の大山哲司さん。漆は1日1度、塗り乾燥を20〜25回くり返し、磨きかけると独特の模様が現れます。もちろんすべて手作業で、黒や朱の漆の塗り分けなどは、長年培った勘によるのだそうです。

弓矢は、古来から神聖なものとして、邪気を祓うための皇室の儀式や正月の破魔矢、流鏝馬、相撲の弓取り式など、今でも多くの神事に残されています。高橋さんは「日本弓道のためにも伝統や技術を大切に継承し、次の世代に受け継いでいかななくてはと思っています。簡略化されたもの、便利なものばかりを追いかけていくと、本当は私たちが遺していかねければならないものが、いつのまにか消えてなくなってしまうような気がします」

持たせていただいた竹矢は、ていねいに磨かれた竹と漆、矢羽根が一体となつて、精緻でとても美しく、思わず見惚れてしまうほど。熊本でまたひとつ大切な伝統文化に出会ったのでした。



矢羽根は鷲や鷹、七面鳥などさまざま。「羽根の処理のひとつも手間も大切。できあがりによって大きな差が出ます」と大山さん。



漆を何度も塗り重ねるので、完成までに約40日かかるそう。



塗り重ねた漆を磨き上げると変化に富んだ模様が現れます。



高橋さんの息子さんも大学卒業後、同じ工房で修行中です。



タカハシ弓具店

熊本県熊本市大江4-17-29  
TEL 096-364-0273  
<http://www.takakyu.com>